アンバサダーライダー・髙田茉莉亜と佐々紫苑の

欧州馬術レポート

週刊 Gallop 2020年 8月号掲載

日本中央競馬会所属

◆佐々紫苑
（さっさ・しおん）
1995年東京都生まれ。早稲田大学卒。2012年全日本ジュニアライダー総合馬術選手権優勝。15、16年全日本ヤングライダー総合馬術選手権連覇。20年4月にJRA日本中央競馬会入会。17年より日本馬術連盟アンバサダーライダー。

馬心伝心 ―奮闘記partⅡ―

佐々紫苑
Shion Sassa

中学校の走り高跳びの授業で、踏み切りが合わないのに無理やり跳ぼうとしてバーに激突！　なんて経験、皆さんはありませんでしたか!?

障害馬術は、試合の始まる15分ほど前にコースがオープンになり、この時初めて選手がコースを歩いて確認します。馬に乗って下見をすることはできないので、この下見は選手がコースを覚えるのはもちろん、自分の馬の力を最大限に引き出せるような走行ラインを決めるために、とても重要な時間です。

踏み切り位置は人と同じように、近すぎても脚が当たってしまい、遠すぎても飛びきれずバーの真上に着地してしまいます。何よりも、馬自身が「怖い、ここからでは無理だ」と感じると、ピタッとフェンス（障害物）の前で止まってしまいます。

乗り手は自分の馬の歩幅と癖を頭に入れて、一番飛びやすく、タイムロスのないラインに乗せられるようにコース取りを考えます。馬の1歩は約4㍍、私の場合は自分の1歩を約1㍍にして歩き、自分の4歩が馬の約1歩になるように計算します。馬の得意な回転、苦手なアプローチなど、それぞれの馬の特徴を生かしたコース取りが勝敗を大きく左右します。

勝負は、走行前の下見の時間からすでに始まっているのです。障害馬術を観戦するときは、ぜひ下見時間の選手にも注目してみてください。

選手はおのおの走行をイメージしながら下見をします
（©日本馬術連盟）

Let's enjoy Dressage

髙田茉莉亜
Maria Takada

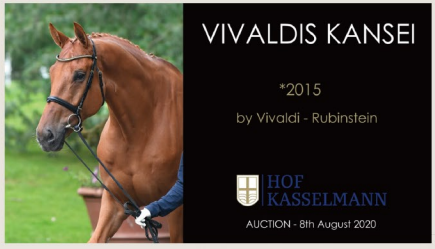
アイリッシュアラン乗馬学校所属

◆髙田茉莉亜
（たかだ・まりあ）
1994年東京都生まれ。慶應義塾大学卒。2010、11年に全日本ジュニアライダー馬場馬術選手権連覇。16年の全日本ヤングライダー馬場馬術選手権で史上初の4連覇を達成した。17年より日本馬術連盟アンバサダーライダー。

毎年各地で盛大に行われるドイツの馬術競技馬のオークション。新型コロナウイルスの影響で諸外国からの来客が減っていることもあり、現在はオンラインを中心に行われています。

つい先日もドイツ一大きな馬場馬術専門の厩舎〝Hof Kasselmann〟のオンラインオークションが行われ、3～6歳の調教途中の若馬から、調教が進んでいる11歳の馬まで合計13頭が落札されました。競馬のセレクトセールに比べると規模は小さいですが、オークションの様子をオンラインで見ていると、欧米諸国に加え、ロシア、台湾、日本、コロンビアなど世界各国から電話やオンラインでの入札があり、かなり盛況のように見えました。また、現地には一列だけテーブル席が用意され、厩舎関係者や事前に招待されたドイツ人の方がオークションに参加されていたそうです。

㊤オンラインの画面には現地で引き馬されている馬と現在の価格がリアルタイムで表示されていました㊦本文で触れたヴィヴァルディーズカンセイは才能あふれる5歳の栗毛でした。ヴィヴァルディーズカンペキだったら良かったのに…（ともに写真協力：Hof Kasselmann Hybrid Auction）



余談ですが、日本風の音楽とともに〝VIVALDIS KANSEI〟という厩舎オーナーイチ推しの馬が登場し、「KANSEIはパーフェクトという意味だと日本の友人が教えてくれました」と言っていて、少し気の毒になりました…（笑）。